様式1

令和7年度　山梨県立盲学校評価報告書（自己評価・学校関係者評価）

学校目標・経営方針	自己実現・社会的自立ができる力を養い、健康で心豊かな人間を育成する。

山梨県立盲学校校長　　水上　奈由美

本年度の重点目標	
	1　連続性を重視した学びの充実
	2　一人一人に応じた指導の充実
	3　自立と社会参加に向けた取組の充実
	4　視覚障害教育相談の充実
	5　働きやすい職場づくり

達成度		
	A	ほぼ達成できた。（8割以上）
	B	概ね達成できた。（6割以上）
	C	不十分である。（4割以上）
	D	達成できなかった。（4割以下）

評価	
4	良くできている。
3	できている。
2	あまりできていない。
1	できていない。

自　己　評　価

本年度の重点目標				年度末評価（1月22日現在）		
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	確かな学力を育てる指導の実践と自ら学ぶ態度の育成	個別の教育支援計画や個別の指導計画をもとに個別最適な学びや協働的な学びの一体的な充実を目指す。	幼児児童生徒の学習状況の評価、学校評価アンケート	・授業などの様子を情報交換し、幼・児・生の指導のねらいや成長について共通理解を図り、実態に合わせた個別最適な学びを進めることができた。 ・各種行事を全校で協力しながら取り組み、幼・児・生にとって社会性の育成を目指す協働的な学びとなった。 ・学習状況の評価を共有、確認しながら指導内容の充実を図ることもできた。各教科、特別活動などにおいて学習内容を連携させるなど教科横断的に取り組むことができた。 ・キャリアパスポートを活用した活動の振り返りで、幼・児・生は自ら評価を行い、自己理解につなげさせることができた。進路希望調査や懇談から、生徒・保護者の希望を把握し、現場実習や進学に繋げるなど、適切な進路指導を行うことができた。	B	・個別の指導計画等を活用した指導方法および評価の共有化や指導内容の適切な引継ぎを実施する。 ・児童生徒が自らの学習状況をより明確に理解できるよう、通知表の提示や個別懇談での評価の伝え方を工夫する。 ・実態が多様化する中、引き続き幼児児童生徒の実態を多面的に把握し、個々の力を引き出す。 ・小学部や中学部など、早い段階から進路について考えられるよう、施設見学や進路たより等を中心とした情報発信をする。
		課題解決型の探究活動や教科横断的な学習の取り組み、学部を超えた学び合い活動の充実。体験的な学習を通じた言語活動の充実。	幼児児童生徒の学習状況の評価、教育課程の反省			
	将来を見据えたキャリア教育の充実と進路の実現	各学部段階に応じて、幼児児童生徒が身につけたい能力や態度を設定し、学ぶことと将来のつながりが見通せるようにする。	キャリアパスポートの作成・活用、学校評価アンケート			
		個々のニーズや実態にあった進路指導の推進。	進路開拓、現場実習の状況、進路見学会の実施状況			
2	障害特性に応じたICT機器を積極的に活用した授業の改善	授業における個々の障害状況に合わせたICT機器の積極的な活用と指導の充実。	視覚障害に対応した機器の設定状況、授業実践の状況、教員の自己評価	・幼・児・生の障害状況を把握し、わかりやすさを支援するため実態に合わせたICT機器の活用ができた。 ・情報・教養部を中心にICT支援員と連携し、ICTの活用方法等をTeamsに蓄積した。研修会などに参加し、教員に伝達や還流報告をした。 ・必要に応じて視能訓練士や歩行訓練士などの専門家及び、医療機関など関係機関と連携しながら幼・児・生支援をすることができた。 ・研究部を中心に視覚障害教育研修会等を実施し、幼・児・生の指導・支援に活かせるよう、校内職員の研修を推進した。講師を招聘した研修会を実施し、専門家から助言をいただくようにした。校外研修会への参加や全日盲研等、他の盲学校と連携した研究活動を推進してきた。	A	・引き続き、ICT機器の活用の促進や専門性の向上を目指した研修に取り組む。 ・蓄積された情報や研修会で得た情報を効果的に活用する方策を検討する。
	障害特性に応じた、専門家を積極的に活用した指導の実践	視能訓練士、歩行訓練士等との連携を生かした指導の充実と授業改善。	専門家と連携後の幼児児童生徒の評価・改善状況			
	教員の指導力向上の取組	教員等育成指標に応じた研修の受講奨励とOJTによる協働的な学びの推進。	教職員個々の研修計画、校内研修計画			
3	社会性の涵養、自主性の伸長を目指す交流及び共同学習の充実	交流（学校間交流、地域交流、居住地校交流）及び共同学習の充実。	交流及び共同学習推進協議会、学校評価アンケート	・地域の幼稚園・小中学校・高校と活発な授業交流及び学校行事への参加や、他県の盲学校とオンラインでの交流を実施するなど充実した学習ができた。地域交流は小・中学部の児童生徒が合同で行い、有意義ながらも地域の方の負担軽減につなげることができた。 ・様々な災害を想定した避難訓練を行い、災害時の対応について確認するなど、実態に合わせた訓練を通して安全教育を推進し、自己管理能力の育成を図った。 いじめの未然防止として道徳教育等を通して生命の尊さを意識した指導を行った。 スタンドアップミーティングなどで細目に幼児児童生徒の情報や様子を共有することでいじめの未然防止につなげることができた。	B	・交流学習については、計画通り実施できるよう日程調整を行う。 ・オンライン交流や居住地校交流について、相手校と連絡を取り合いながら計画して進める。 ・地域の方々とも、無理のない範囲で交流や協力を進めていく。 ・臨床実習や避難訓練など体験的な学習の機会を設定し、発達段階等に合わせながらふりかえりができるようにしていく。
	社会の状況に対応し、適切に活動する自己管理能力の育成	自己を理解し心身の健康を意識した望ましい生活習慣を形成したり、他者と協働しながら日常生活を送ったりする力を育成する。	出席簿、保健日誌、学校評価アンケート			
	いじめ防止に向けた取り組み	学級活動を行う中で居場所づくりを進め、道徳教育の充実をし、いじめの未然防止を目指す。いじめの早期発見のため情報交換を密に行う。	学部会、企画委員会、アンケート、いじめ対策委員会			
4	視覚障害教育相談の推進	Eye愛ひとみ相談支援センターの啓発と相談の充実。	実施状況、学校評価アンケート、弱視教育連絡協議会記録	・Eye愛ひとみ相談支援センターと他分掌が連携して、県内の弱視児童を対象としたサマースクールと合わせてオープンスクール（学校説明）を実施した。 ・HPやブログ等による学校行事や学習の様子の積極的な配信を行った。 ・日本臨床眼科学会で本校教育相談の発表を行い、早期発見・早期教育の重要性についてアピールすることができた。 ・年度途中で追加となった中途障害児や保護者の心情に寄り添いながら、各機関との連携のもと、支援体制を整えることができた。	A	・オープンスクールの開催方法を検討していく。 ・視覚障がいのある方の早期発見・早期教育の実現に向け、本校の実践を積極的に発信し続けていく。
		情報発信と社会的ニーズの把握。	実施状況、学校評価アンケート			
		医療・福祉・行政・教育関係機関との継続した連携。	連携状況、学校評価アンケート			
5	やりがいを両立した働き方改革の推進	適材適所の校内人事を実施する。	学校評価アンケート	・分掌によって、業務分担の偏りが見られた。業務の平準化や精選が求められる。 ・行事のあり方を見直し、精選に繋げられる部分もあった。学部会において、今年度の行事の反省をしつつ次年度に向けての行事について検討することができた。 ・各種会議の見直しを行い、開催方法や時期を変更する等やりがいを両立した働き方改革を推進した。会議の終了時間を共有し、会議の短縮化を意識しながら会議を実施することもできた。Teamsを活用した会議やオンラインを活用した情報共有を実施することができた。	B	・分掌業務を見直し、人数、担任の持ち方、学部業務の分担など、校内人事を検討する。 ・引き続き各学部や分掌ごとに、学校・学部行事や各種会議の見直しと精選を進める。 ・紙ベースで発行しているものに関して、データベースで発行できないか等検討していく。 ・過去の資料を活用しながらの資料作成など、取り組みについての効率化を図る
		学校・学部行事や各種会議の見直しと精選を進める。	学部会、企画委員会、学校評価アンケート			

学校関係者評価

実施日　（令和8年2月12日）

評価	意見・要望等
4	・幼児児童生徒が日常の学習と学校行事の双方の場面において、連続性のある取り組みができる点も、盲学校の強みの一つ。様々な場面において個々の指導のねらいに基づき、それぞれの力を十分に発揮できるよう適切に課題が設定され、指導が行われている様子がホームページ等に掲載された具体的な報告からも十分伝わってきた。 ・幼稚部、小学部、中学部、高等部とスムーズな進学ができている。途中入学の子どももうまくなじんでいる。 ・それぞれの発達段階に応じた進路指導が一層充実したものになり、本校が更に「選ばれる学校」になることを期待する。
4	・ICT機器の活用については、他県盲学校との交流や複数の大学との連携において、ICTが積極的に活用されている様子。継続的に高く評価される取り組みであると認識している。 ・視能訓練士等専門職との連携や教員研修についても十分に取り組まれている様子である。今後も一層の充実が図られることを期待する。 ・幼児児童生徒の自立を目指し、個々の障害状況、特性に応じた指導・支援がしっかりと行われていると思う。指導の基礎となる研究・研修も一層充実していって欲しい。
4	・交流には地域として、これからも協力していく。このような活動はいじめ防止にも寄与していると思う。 ・対面及びICTを活用したオンラインの双方の形態により、地域との交流並びに盲学校間の交流という視点を明確にしながら、継続的に実施されている点を高く評価した。 ・今後は本校の幼児児童生徒が支援する側になる活動を充実できるように取り組んで欲しい。 ・防災訓練等の安全教育についても、年間を通して計画的に取り組まれており、社会参加を意識した取り組みが各部の連携を測りながら継続的に推進されている様子がうかがえた。
4	・相談支援センターの取り組みについては、従前どおり大変丁寧に実施されている。 ・県内の弱視児童を対象とした指導・助言・相談等についても限られた職員体制の中にあって、専門性の高い取り組みが着実に行われていることがうかがえる。今後県による一層の職員配置及び予算面での支援が図られることを期待する。 ・日本臨床眼科学会等における発表は、大変意義深い成果である。眼科医や療育関係者、教育関係者に実践を共有することは、児童生徒の暮らしやすさの実現につながる。 ・メディア等を有効活用しながら継続的に情報発信ことが重要である。方法のアップデートも必要である。 ・大学のロービジョン外来もうまく機能している様子である。
3	・会議のあり方を含めた業務改革が進められている様子が認められる。 ・加配教員の配置の必要性や予算面での一層の充実について強く望まれるところである。 ・「選ばれる学校」となる取り組みとして、視覚障害教育の専門性を明確に打ち出すとともに、視覚以外の感覚を伸長する教科の充実を図っている学校がある。 ・盲学校に限らず、教員の過重労働は大きな問題である。 ・今後は一層の意識改革が必要で、現在は当たり前と思っている業務についても大きく変更すべき点があると思う。教育の質を落とさず、働き方改革を進めて欲しい。

留意点　（1）重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。
（2）学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。